

大堀城跡Ⅲ

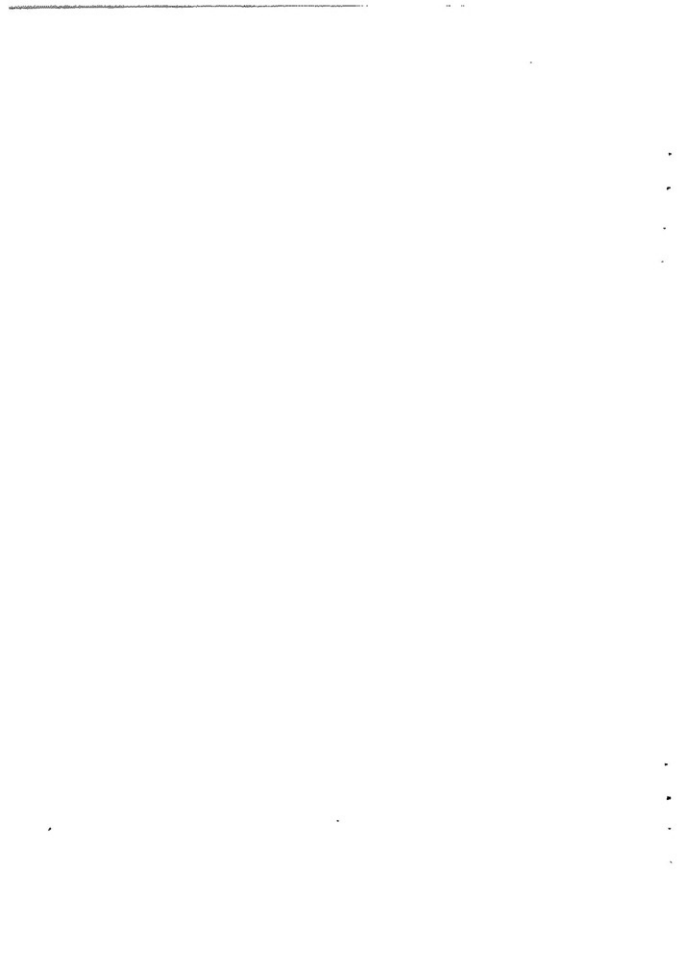
近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

大阪府教育委員会
財団法人 大阪文化財センター

大堀城跡Ⅲ

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

大阪府教育委員会
財団法人 大阪文化財センター



例 言

1. 本書は、日本道路公団が建設を進めている近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う発掘調査のうち、松原市大堀町に所在する大堀城跡第2次（その2）発掘調査概要報告書である。
2. 本調査は、大阪府教育委員会及び財団法人大阪文化財センターが、日本道路公団大阪建設局の委託を受けて実施したものである。
3. 本調査に要した費用3,145,000円はすべて日本道路公団が負担した。
4. 本調査は、昭和59年11月12日から同60年1月30日までの間実施した。
5. 本調査並びに本書作成は、大阪府教育委員会の指導の下に、財団法人大阪文化財センターが実施したものである。調査並びに本書作成に関係したものは以下の組織表のとおりである。

調査関係者組織表

事務局	理事兼事務局長	小林寛喜
	次長兼総務課長	尾田勝之
	主幹兼庶務係長	阪上允子、主査 田中喜代子、主事 秋山芳廣、灰木明子、千野和久、田口宗義、宮本哲男、鈴木洋子
	主幹兼普及係長	福岡澄男、技師 杉本貞子、主事 小島容子
調査総括責任者	業務課長	泉本知秀
	業務課主幹	吉村信男
長吉分室	業務第2係長	赤木克規、技師 平井貞子（写真）
	業務第3係長	広瀬和雄、技師 石神幸子、藤沢真依、辻本 武、杉本二郎、上林史郎、藤永正明、阿部幸一、岩瀬 透、入江 正則

また、調査に際しては、日本道路公団大阪工事事務所、大阪府八尾土木事務所及び松原警察署等に格別の配慮を受けたとともに、現場調査及び整理作業においては、以下の学生諸君の協力を得た。

井上 剛、岡 章夫、笠井 勉、小柳 治、佐野貴志、友田和男、西村勝久、西本浩之、馬勝和英、前吉淑子

6. 本書の執筆は、業務第3係長、広瀬和雄の指導のもとに、入江正則が担当した。また、遺構写真は入江が撮影し、遺物写真は平井貞子が撮影した。編集は石神幸子が担当した。
7. これまでの概報においても記したように、契約時の遺跡名は「大堀城跡」であったが、本調査においても当城郭に相当する遺構は確認できていない。むしろこの城郭以外の性格の遺構を検出しているため、本文中の遺跡名の記載は「大堀遺跡」とする。
8. 遺構名の表示は、遺構名、遺構記号と遺構番号の間に調査区名を入れ、従来の概報を踏襲し

ている。また、今回検出された遺構の番号はトレンチ調査部分及び切り掛け部分の続き番号を与えており、同じ遺構の場合は同じ遺構名を付している。

9. 本書の遺構平面図の方位は、すべて真北を示す。
10. 本書の遺構実測図の縮尺は、 $1/400$ 、 $1/40$ である。
11. レベル高は、T.P.±で表記した。
12. 遺構のスケールはmで表示している。
13. 本調査にあたっては、写真、実測図等の記録とともに、カラーズライドを数多く作成した。本書に記載した以外の資料については、財団法人大阪文化財センターにて保管しているため、広く活用されん事を希望する。

大堀城跡Ⅱ

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

目 次

〔1〕調査に至る経過	1
〔2〕調査の目的と方法	1
〔3〕調査の成果	2
〔4〕まとめ	4

図 版 目 次

図版 1	A-14・15調査区全景
図版 2	B-1 調査区全景、B-6 調査区各遺構（B-6 調査区第一遺構面）
図版 3	B-7 調査区全景、B-6 調査区各遺構（B-7 調査区第一遺構面、B-6 調査区第二遺構面）
図版 4	B-7 調査区全景、C-7 調査区各遺構（B-7 調査区第二遺構面、C-7 調査区水路付け替え部）
図版 5	A・B 調査区遺構断面（井戸A-7、井戸B-1）
図版 6	B 調査区各遺構（土坑B-16）

挿 図 目 次

第 1 図	調査区配設図及び地区割り (1/500)	1
第 2 図	A-14・15調査区遺構平面図 (1/500)	5・6
第 3 図	C-1 調査区遺構平面図 (1/500)	8
第 4 図	B-6・7 調査区第一遺構面遺構平面図 (1/500)	9
第 5 図	B-6・7 調査区第二遺構面遺構平面図 (1/500)	10
第 6 図	C-7 調査区水路付け替え部遺構平面図 (1/500)	11
第 7 図	遺構断面図、井戸A-7・B-1、土坑B-16 (1/50)	12

表 目 次

第 1 表	遺構一覧表	7
-------	-------	---

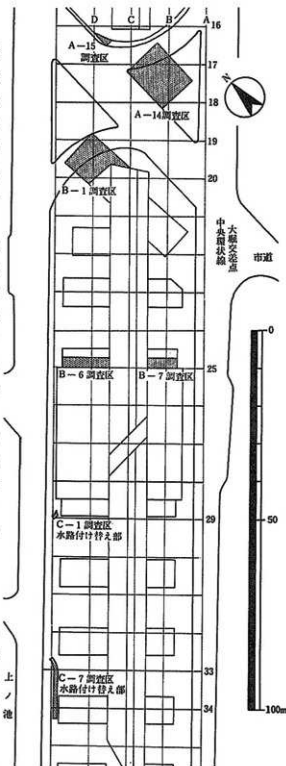
(1) 調査に至る経過

これまで大堀遺跡は、試掘調査、トレンチ調査、切り掛け調査とこれらの調査以外に特殊マンホール部調査を実施して来たが、今回の調査は近畿自動車道関係の調査では4番目の調査にあたる。これまでの調査によって橋脚となる大半の部分は調査を終えているが、大堀交差点付近の若干の未調査箇所、特殊マンホール工事によって調査できなかった箇所、農業用水路の付け替え箇所においてそれぞれ調査が必要であり、これらの箇所についての協議が、大阪府教育委員会と日本道路公団によってもたれた。この協議の結果、日本道路公団、大阪府教育委員会、大阪文化財センターの三者は先に述べた部分の調査を実施する旨の契約を昭和59年11月12日に締結した。大阪文化財センターは、昭和59年11月15日より調査に着手し、昭和60年1月30日にすべての調査を完了した。調査をすべき箇所は交差点部分3カ所、特殊マンホール部に接した未調査箇所2カ所、農業用水路付け替え部2カ所、合計7カ所の調査箇所は総面積281㎡であった。(第1図)

(2) 調査の目的と方法

大堀遺跡は『大堀城跡』においても触れたごとく、すでに3次の調査が実施されて来た経過があり、これを踏まえて、今回の調査においても地区割り、調査区名称、遺構番号等基本的な事項はすべて従来の方法と認識を踏襲した。

調査は過去に調査されて来た箇所の遺構との関連性を把握する事が主な目的となり、さ



第1図 調査区配置図及び地区割り (1/500)

らにこれまでに検討課題となっていた問題点について新たな知見が得られればという目的もかねそなえた。

調査方法については各調査区のうち、遺構上層および地山層まで中央環状線の土壌改良の為削平が及んでいる箇所については地山検出面まで、その後は包含層上面まで機械掘削を実施し、残りの部分を人力掘削で調査した。

〔3〕 調査の成果

今回の調査は調査区が広い範囲にまたがって散在し、全体的なまとまりに欠けており、前回までの様な各遺構の種類ごとに一まとめにした説明では理解し難い側面があると思われるため、本文中では各調査区ごとに遺構を記載した。また本文中に記載しなかった遺構については一覧表にして示したので参照されたい。

各調査区の基本層序についてはA調査区の延長箇所については、A調査区、B・C調査区の延長箇所については、B・C調査区の前回報告の基本層序に則っている。

A-14調査区 (第2図、図版1)

遺構面は、T.P.+15.4~15.7mを測り、周辺のこれまでの調査結果と比較すると約0.3~0.6mの削平を受けたと考えられる。井戸1基、土坑4基、若干のピットが認められた。

井戸A-7 (第7図、図版5) A-17・18区にある検出面はT.P.+15.7mで、0.3m削平されたと考えられる。少しびつな円形の素掘りであり、断面では底部より0.5m高くなったあたりの横方向が最もくずれていた。瓦器の細片および須恵器片を埋土上層から出土した。このほかに出土した遺物は丸瓦、羽釜、木製品等である。この井戸の時期については極めて限られた資料からであるが、鎌倉、室町時代頃と推定し得る。

A-15調査区 (第2図、図版1)

遺構検出面はT.P.+15.6~15.7mを測り、0.2~0.3mの削平を受けたと考えられる。遺構は柱穴を9個検出したが、従来の調査成果とあわせて、建物等の復元に努めたが、建物として復元し得る柱穴はわからなかった。

B-1調査区 (第3図、図版2)

遺構検出面はT.P.+15.2~15.5mを測り、削平は0.7~1.0mにおよぶと考えられる。井戸2基、土坑2基、ピットを数個検出した。

井戸B-1 (第7図、図版5) 井戸の検出面はT.P.+15.2mを示し約1m削平されていると考えられる。井戸は素掘りの円形で断面では底面から0.6m付近が最も横方向にえぐれている。出土した遺物は須恵器の杯、甕の底部、甕、土師器 小型甕等で奈良時代を示す遺物が大半であるが、1点のみ瓦質の火舎が含まれていた。これから判断すれば井戸の埋設時期は中世後期と考えられる。

B-6調査区 (第4図、図版3)

当調査区では基本層序のⅡ層から認められた。Ⅲ層上面には、溝BW-5およびピット群を認めた。またⅡ層中から遺構に伴わないが、完形品に近い平瓶を出土し、Ⅱ層下の第二遺構面には落ち込み、土坑、ピット群が存在した。

ピット Ⅲ層上面に検出し、一列に並ぶものとこれからはずれるものがある。建物の柱穴にはならない。

溝BW-5 トレンチ調査と切り抜け調査の延長部分を発掘した。溝内からは染付、近世の挿鉢等のほか須恵器、土師器、石器の剥片等も一緒に出土した。

Ⅱ層黄灰色粘土層 層厚15cmほどであるが、C25・26区付近から、比較的大きな遺物が集中して出土した。須恵器 杯高台部、壺高台部、長頸壺体部上半の破片、平瓶、これ以外には土師器杯を出土した。最も古い時期では6世紀末から7世紀初頭ごろの平瓶から8世紀前半頃の須恵器杯、9世紀初頭ごろの土師器 杯まであり時間的にはまとまっていなかった。集中していた以外の所からも土師器 杯、羽釜、瓦器の高台等を出土した。これらの遺物は確定的な事は言えないが、13～14世紀頃の瓦器まで出土している。

B-7 調査区 (第5図、図版4)

当調査区は基本層序Ⅱ層から存在していた。Ⅲ層には落ち込みと土坑、Ⅱ層下の第二遺構面からは土坑を認めた。

溝B-26～32 Ⅲ層を切り込み面とし、互に平行に規則正しくならぶ。遺物がほとんど出土しない為時期は確定できない。

土坑B-16 B-7調査区東側にあり、部分的な調査の為、西辺が一直線をなす所が検出されたのみで全体の形状等はわからない。切り込み面は地山面であり、遺構の断面形状は開口がほぼ垂直を示す部分では中途に段を作る部分と、また上から下まで垂直な面を持つ部分がある。底面は凹凸が激しい。埋土は灰紫色粘土層や暗灰紫色粘土層と地山層に非常に似た灰黄色粘土層からなる。遺物は土師器の小片があちこちに分散して出土し、炭も少し出土した。遺物は風化がはげしく表面の調整はもとより器形すらも判断し難い状況であるが、わずかに、庄内・布留期とおぼしき壺破片があり、古墳時代前期ごろと推定できた。

溝BW-6 特殊マンホール部および切り抜け部にて調査した部分に隣接する箇所を調査した。この溝の上層がⅡ層を切り込んでおり、土坑B-16・17も削平する。出土遺物は須恵器片や土師器 羽釜の破片のほか、以前の概要報告書に記載した玄武岩、安山岩質の石器も7点出土した。

C-1 調査区

予定調査深度まですでに既往の工事で削平を受けており、調査を実施しなかった。

C-7 調査区水路付け替え部 (第6図、図版4)

若干の土坑等を認めた。これらのうち土坑C-34からは須恵器の破片を1点出土した。

(4) まとめ

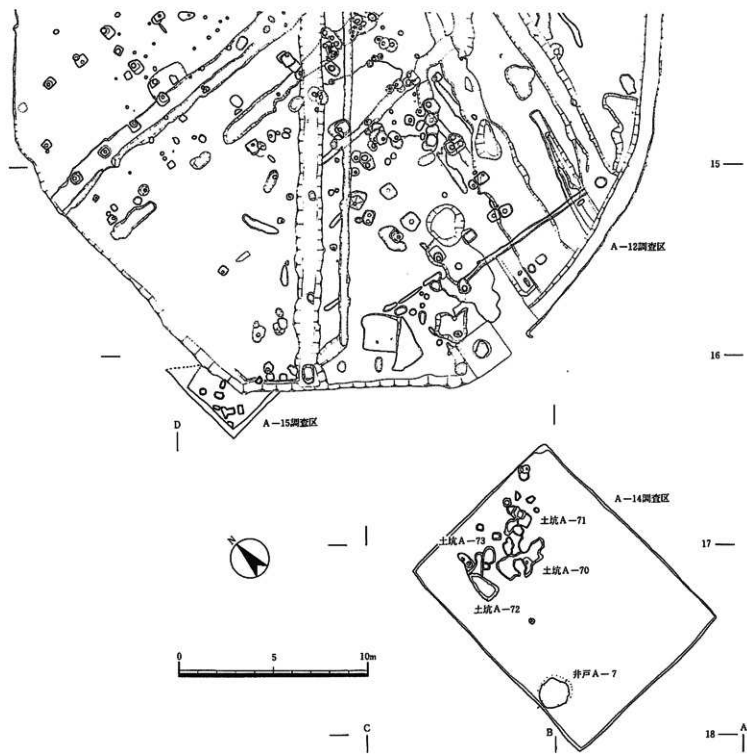
1. 旧石器時代、縄文時代、弥生時代のどの時代に属するかわからないナスカイトの剥片および玄武岩、安山岩質の石器を約10点出土したのみで、前々回検出されたナイフ形石器や楔形石器は検出されなかった。

2. 古墳時代前期ではB-7調査区の土坑B-16の検出が注目に値する。これまでの知見ではこの時代には遺構、遺物とも何も認められなかったが、今回の調査で始めて遺構を確認し得た。これはこの時代に、すでに洪積段丘中位面での人々の活動があった事を示す資料であるが、残念ながら、この遺構の持つ意味については全くわからない。今後の検討課題である。

3. 古墳時代後期では、B-6調査区黄灰色粘土層から、6世紀末から7世紀初頭頃と思われる平瓶を出土した。これまでも、B、C調査区からこの時代に前後する須恵器 長頸壺、提瓶等を何点か出土していた。このことはこれらの遺物が出土した地点の至近距離に何らかの遺構が存在している可能性も考えられる。今後の検討課題としておきたい。

4. 奈良時代では、築落の範囲内に入っている位置にて、遺構が相当数認められて然るべき位置を調査したにもかかわらず、遺構検出数も少なく知見の変更は認められない。1点付け加えるべき事項は、C-7調査区水路付け替え部の遺構から須恵器片を出土した事は、遺構が開折谷底面にまで拡がる可能性も示唆した。この点についても検討課題としておきたい。

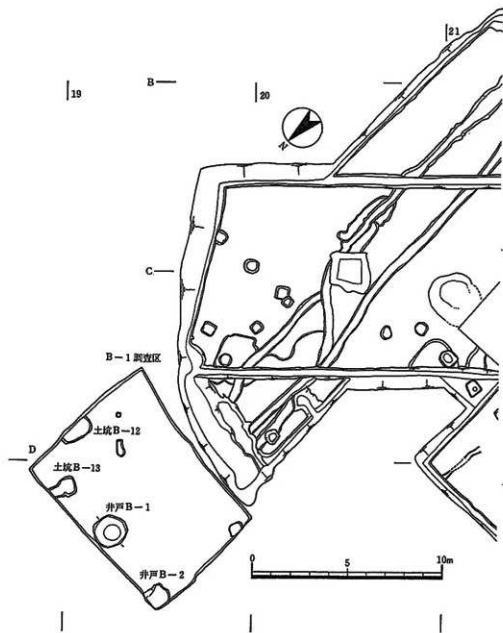
以上、新たな知見および注意すべき点、新たな検討課題について述べたが、これら以外の諸点については従来の見解を再確認したにとどまった。



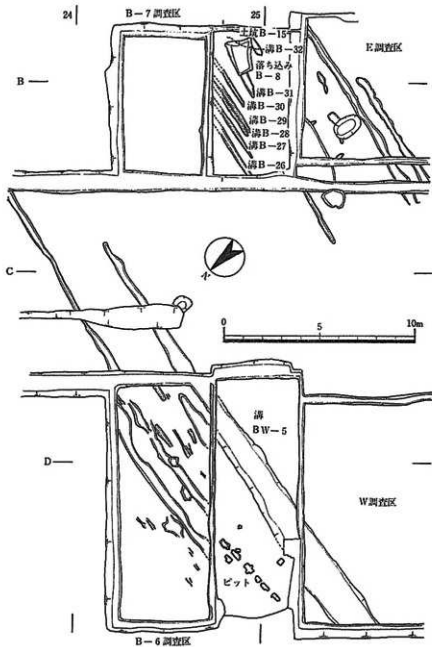
第2图 A-14·15調査区遺構平面図 (1/200)

第1表 遺構一覽表

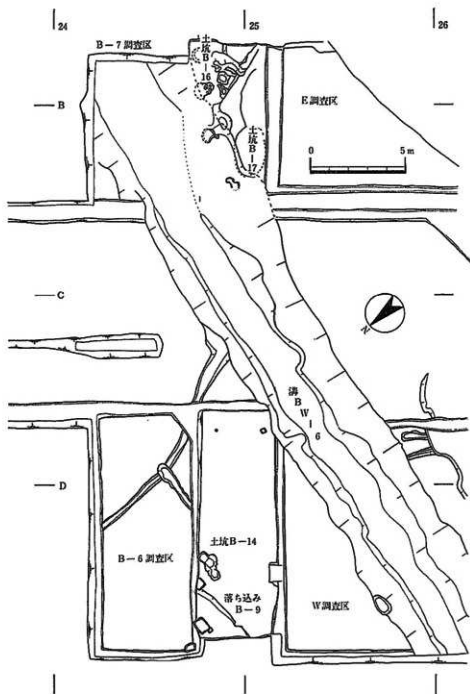
遺構名	調査区	経度(m)	緯度(m)	高さ(m)	平面形状	断面形状	埋	土	出土遺物	備考
弁戸A-7	A-14	1.60	1.46	約2.50	少しいびつな円形	上部径よりも下部が横方向に大きくくぼんで立上がっている				茶張り、検出層 T.P.+15.7m
土坑A-70	A-14	2.84	1.32	0.1-0.15	不定形	開口は傾斜を持たず底面は平坦	褐色色粘質土層、灰色粘土層、断面西側部			検出層T.P.+15.62m
土坑A-71	A-14	1.67	1.65	0.05	不定形で突出部をもつ	開口は傾斜を持たず底面は平坦	褐色色粘土層			検出層T.P.+15.50m
土坑A-72	A-14	1.78	0.88	0.15	先鋒の丸くなった扇形三角型に近い	開口からゆるやかに底面に至る	褐色色粘土層			検出層T.P.+15.66m
土坑A-73	A-14	1.08	0.43	0.05-0.08	方形で厚い楕円形	開口から傾斜を持たず底面は平坦	褐色色粘土層			検出層T.P.+15.05m
土坑A-15	A-15	0.35-0.5	0.25-0.35	0.05-0.15	方形で厚い楕円形	開口から傾斜を持たず底面は平坦	褐色色粘土層あるいは灰褐色粘土層			全部で9個検出
弁戸B-1	B-1	1.75	1.60	約2.60	少しいびつな円形	底部より60cm高い部分の横方向にえぐれている。	褐色色粘土層その他、断面西側に			茶張り検出層 T.P.+15.2m
弁戸B-2	B-1	0.1.0	0.09	0.072	少しいびつな円形	途中に段を作る	褐色色粘土層			検出層T.P.+15.4m
土坑B-12	B-1	0.1.75	0.09	0.07	半月形	開口は急傾斜で底面はゆるやかに進む	褐色色粘土層、淡灰色粘質土層、褐色色粘土層			
土坑B-13	B-1	0.1.37	0.1.0	0.1-0.6	不定形	開口から急傾斜で底面に至る	褐色色粘土層			検出層T.P.+15.4m
ピット	B-6	0.6	0.3	0.05	長方形が少しくずれた形	開口から傾斜で底面に至る	褐色色粘土層			層の上から5層目迄
番込鉢B-4	B-7	1.80	1.34	約0.20	台形状を示す	開口から急傾斜で底面に下る	褐色色粘土層、褐色色粘土層			層の上
漆B-29-32	B-7	0.15-0.23	0.08-0.1	一底面互に平行である		ゆるやかな断面を示す	褐色色粘土層			層の上7本検出
番込鉢B-4	B-6	0.3.6	0.1.85	0.01	断面は底面では不明である	開口からゆるやかに傾斜する	褐色色粘土層			V層上から5層目迄
土坑B-14	B-6	1.64	0.75	0.7	不定形	開口から急傾斜で落ち込む	褐色色粘土層から灰色粘土層まで漸次変化する			V層上
ピット	B-6	0.2-0.7	0.2-0.7	0.25-0.15	方形を示す	開口から垂直に下り底面に至る	灰色粘土層			V層上
土坑B-15	B-7	0.2.0	0.1.3	0.02	一辺のみ判明し全体形状は不明	開口から傾斜をもって底面に至る	灰色粘土層			V層上
土坑B-16	B-7	0.6.5	0.2.92	0.06	一辺のみ判明し全体形状は不明	垂直に落ちる部分とゆるやかな傾斜を持つ部分がある	褐色色粘土層、褐色色粘土層			V層上
土坑B-17	B-7	0.2.5	0.1.2	0.02	溝B-6に平行されて全体形状不明	開口は傾斜し底面は平坦	褐色色粘土層			V層上
溝C-20	C-7	0.77	0.15	0.07	細長く、くの字状に面通する	開口から急傾斜である。	褐色色粘土層			V層上
土坑C-83	C-7	0.1.60	0.1.0	0.015	不定形、東側から狭く	開口から急傾斜で底面は平坦一部分深い所がある。	褐色色粘土層			V層上
土坑C-34	C-7	0.10.55	0.10.25	0.040	円形	ロータ状に開く。	褐色色粘土層から灰褐色粘土層まで漸次変化する			V層上
土坑C-35	C-7	0.10.90	0.10.60	0.014	円形	開口から急傾斜で底面は垂直に至る	褐色色粘土層			V層上



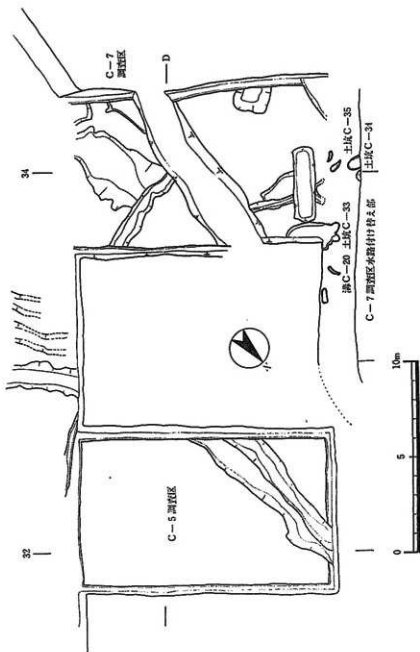
第3图 B-1 调查区遗址平面图 (1/400)



第4図 B-6・7調査区第一最構面遺構平面図 (1/500)



第5图 B-6·7調査区第二层楼面叠碁平面图 (1/400)



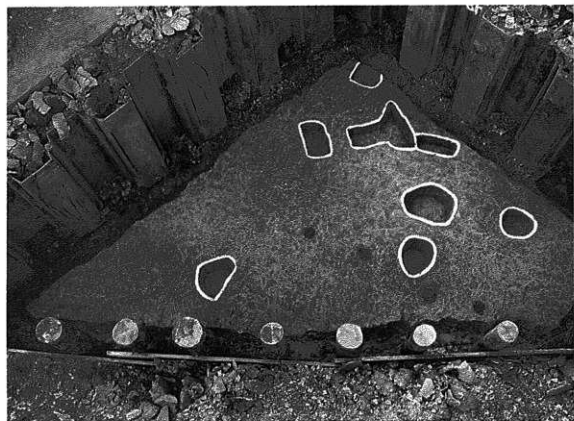
第6図 C-7調査区水路付替え部遺構平面図 (1/500)

図

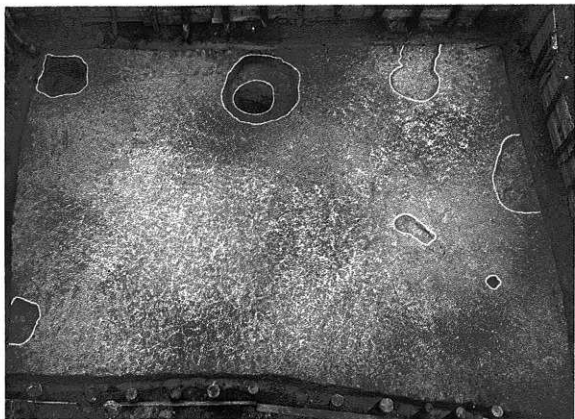
版



A-14調査区 (東から)



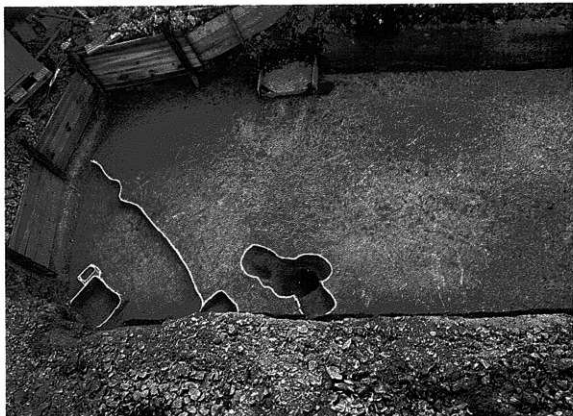
A-15調査区 (北東から)



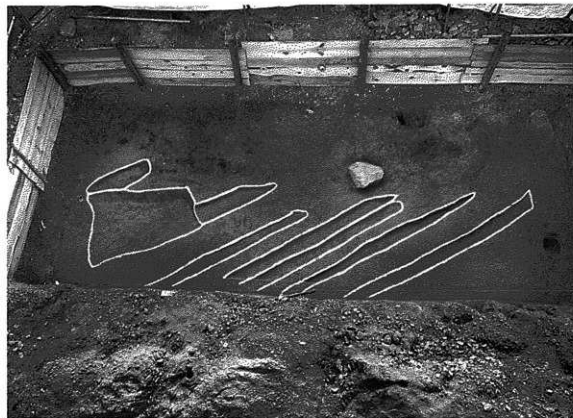
B-1 調査区 (南から)



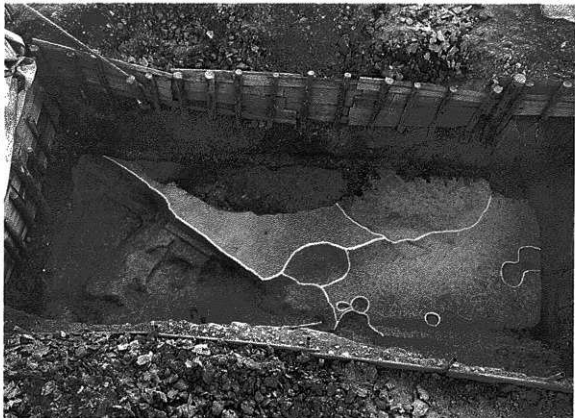
B-6 調査区第一遺構面 (北から)



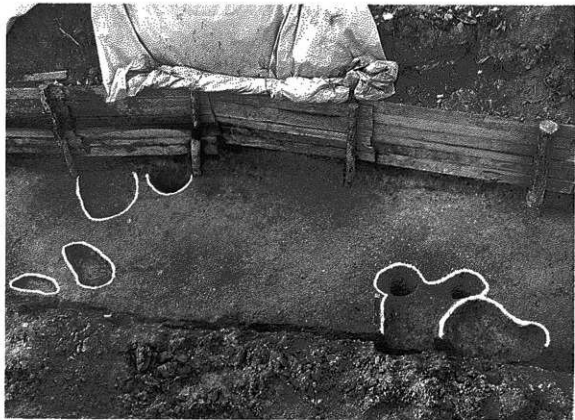
B-6 調査区第二遺構面（北から）



B-7 調査区第一遺構面（北から）



B-7 調査区第二遺構面（北東から）



C-7 調査区水路付け替え部（南から）



井戸A-7 立ち割り状況（東から）

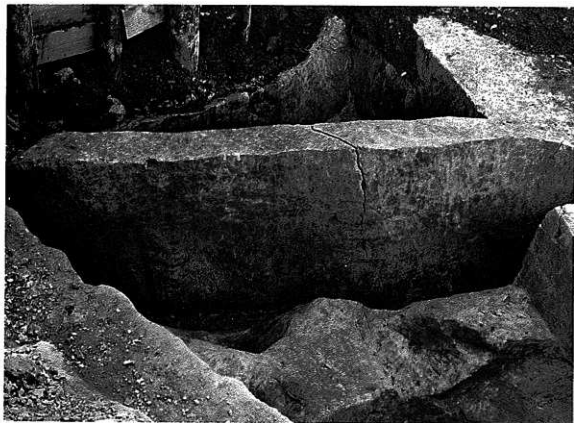


井戸B-1 立ち割り状況（南から）

図版六
B調査区各遺構



土坑B-16部分(西から)



土坑B-16断面(北西から)

大堀城跡Ⅲ

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

1985年10月17日発行

大阪府教育委員会
財団法人 大阪文化財センター
大阪市城東区龍生2丁目10番28号

印刷所 株式会社 中島弘文堂印刷所
大阪市東成区深江南2丁目6番8号